

『紅樓夢』の絳珠草と『星の王子さま』のバラに関する考察*

池間里代子**

はじめに

本稿は中国清代（18世紀中葉手稿本成立）の小説『紅樓夢』とフランスで1943年に刊行された『星の王子さま』の両作品に共通する「はかなき花」へのまなごしを検証することにより、時代・空間を隔てながらも共通するテーマを抽出することを目的としている。

『紅樓夢』と外国文学との比較は、日中研究者による大量の『源氏物語』との考察が目を引き⁽¹⁾が、西洋の作品との比較は少ない。わずかに武田泰淳の「賈宝玉とピエール」において『戦争と平和』との比較エッセイがみえるだけだ⁽²⁾。しかも、『紅樓夢』と外国文学作品とを比較する場合、ほとんどが物語の枠組み、すなわち貴族家庭での恋愛を問題の所在としている。本稿では主人公が「はかなき花」へとそそぐ視線に注目し、なぜそのような視点が生まれたのかについて考察するものである。

使用テキスト：日本語『紅樓夢』上・中・下 伊藤漱平 平凡社 1973：昭和48年

『星の王子さま』内藤濯 岩波書店 1953：昭和28年

中国語『紅樓夢』人民文学出版社 1982年

フランス語『対訳 星の王子さま』アントワヌ・ド・サンテグジュペリ

小島俊明 訳注 第三書房 2006：平成18年

引用は『紅樓夢』を \square 、『星の王子さま』を \square とし、原文は末尾に付した。

1. 『紅樓夢』絳珠草について

中国四大奇書の1つとも言われる『紅樓夢』の成立には複雑な事情があり⁽³⁾、テキストを研究する学派があるほどだ。通行する『紅樓夢』は120回本⁽⁴⁾で前80回の作者が曹霑（雪芹）、後40回の作者が高鶚（蘭墅）と言われているがなお不明である。

物語には天上界と地上界とが設定され、天上界から地上界へ降下した登場人物たちが織りなす貴族生活の描写が主なストーリーである。この物語に出てくる人物は500余人⁽⁵⁾と言われる

* The Transient Flower — an Examination of Jiangzhucao of *Hongloumeng* and *The Rose of the Little Prince* —

** Riyoko Ikema 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)
キーワード：『紅樓夢』 林黛玉 『星の王子さま』 バラ 対比

ほどの大部であると共に、作者が張りめぐらした伏線によって主人公の将来が暗示されたり、どんでん返しがあるなど小説としての完成度が高い。物語は様々な仕掛けでばかしてあるが、作者の自伝的作品であるらしい⁽⁶⁾。その中で、天上界にいた絳珠草という仙草は、下降した地上界の人物・林黛玉という少女になったとされている。本稿では絳珠草に注目して論を進めていきたい。

絳珠草のいわれはこうである。

紅① 西方は靈河のほとり、三生石のかたわらに、絳珠草と申す草が一株生えておった。その時、赤瑕宮に神瑛侍者と申さるるかたがおられ、日ごとに甘露を灌いでやられたので、この絳珠草もおかげで初めて長の歲月、その命を延ばせた次第。のちには、もともと天地の精気を受けて生れついた上に雨露を身の養いとしたせいで、草木のかたちを脱して人間の姿をとるに至り、なにやら女人らしき姿を現じて、ひねもす離恨天の外に遊びにでかけ、腹がすけば蜜青果を食べて飯代わりにし、咽喉がかわけば灌愁海の水を飲んで吸物に代えるというふう。それがまだ甘露を灌がれた恩を報じておらぬところから、その気がかりが昂じ、五臓のうちにやるせない思いを鬱結させるにいたった、とこうおぼしめせ。

ところがたまたま近頃、どうしたはずみかその神瑛侍者どのが煩惱のとりことなられましてな、おさまれる太平の御世をこれさいわい、浮世に降ってまぼろしの縁を閲してみたいとて、すでに警幻仙姑のおんもとまで願い出てその許可をとっておられる。警幻どのもかねて絳珠仙女が甘露を灌がれた侍者の恩に酬いておらぬよし聞きおよんでおられたので、これを機会にけりをつけたらどうかとのお勧めがあった。そこで絳珠仙女が申すには、あちらが甘露を恵まれましたのに、わたくしの方はお返ししたす水とて持ち合わせないためそのまま過ぎておりました。仰せのようにあちらが下界へ降って人間となられるということであれば、わたしも下界へ生まれ変わりとうございます。そうしておよそ一生に流せるだけの涙をばそのお返しといたしましたなら、はばかりながらあちらに対しご恩報じの真似事だけでもかないましよう、とこうですからな。…⁽⁷⁾

地上界で絳珠草は亡き母の実家に仮住まいする持病持ちの、繊細でプライド高い美少女・林黛玉として描かれている。彼女は賈府の「大観園」という庭園にある住居で暮らしていたが、涙尽きて亡くなり天上界へ帰る。主人公の賈宝玉はもと神瑛侍者であったが、夢の中という形で天上界へ行き、そこで絳珠草を見つける。

紅② ある宮門にくぐり入りますと、その内側には珍しい草花が生えていて、どれも彼には見分けのつかぬ物ばかり。なかに白い石の欄干に守られて一もとの青草が生えており、その葉ずえにはほんのり紅味がかかっています。いったいなんという名の草だろう、これほど大切にしているのは、と見るうち、一吹きそよ風が起こったかと思うと、かの青草ははやゆらりゆらりとなよやかに揺れつづけて止みません。たかが一もとの小草、花一つつけてもおらぬのにと思うものの、そのあでやかな風姿を前にしては、思わず胸はあやしくときめき、魂もいづくへか飛びゆかん心地がします。…「仙女さまはそうして仙草のお世話

をなさるのが役目だとおっしゃいますからには、さだめし花の仙女さまでいらっしやいましょう。それにしても、この草にはいったいどんなよいところがあるというのでございましょうか？」するとその仙女は答えて、「この草のことが知りたいの？ でも、話せば長くなりますよ。この草はもと霊河の岸辺に生えていた『絳珠草』という名の草なのです。その時分はしおれかかっていたのを、さいわい神瑛侍者というおかたが日ごとに甘露を注いでやられたので、お蔭を蒙って久遠の生命を延ぶることができるようになりました。そののち下界降って劫を経、甘露を注がれたご恩報じを終えて、いまやこうして真境にもどられましたゆえ、警幻仙姑さまはわたしにそのお世話を命ぜられ、蜂や蝶がむやみとつかないようにと、かたく見張りを仰せつかっているのです。」宝玉にはそこまでいわれてもさっぱり合点がゆきかねました…⁽⁸⁾

絳珠草は自分を好意で助けてくれた神瑛侍者に感謝し、彼の降下に従った。そして水の御礼に涙を流すという恩返しを終了したと同時に天上界へ帰って行ったのである。もちろん、林黛玉は自分の前世のために涙もろいということを知らずに地上界で生活している。林黛玉は物語の主人公である賈宝玉と心が通じていたが、自分が孤児であることや病身であること、さらにライバル的存在である薛宝釵という良妻賢母型の少女に対する感情がコントロールできず、常に不安であった。作者は絳珠草という形象を作ることによって夭逝した林黛玉の救いとしたのではないだろうか。

2. 『星の王子さま』バラについて

『星の王子さま』はアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ（1900年－1944年）により1943年にアメリカで刊行された⁽⁹⁾。本邦では内藤濯の翻訳が1953：昭和28年岩波書店から出版され長く親しまれていたが、2005年1月に翻訳出版権が消滅したため現在では電子版も含めて20種類の翻訳が発表されている。映画は1974年イギリス・アメリカ合同制作と、1983年フランス制作の2種類が作られ上映された。アニメーション・プラネタリウム番組・ミュージカルなど多くの作品が創作されたと共に、日本の箱根には「星の王子さまミュージアム」がある。このように世界的規模で受容されており、単なる童話としてだけではなく『星の王子さまの世界 読み方くらべへの招待』（塚崎幹生 中公新書 2006：平成18年）のような深読み書なども刊行されている。

本稿では『星の王子さま』の中で特にバラについての記述を抽出し、考察する。

テキストは内藤濯訳1962：昭和37年岩波書店『星の王子さま』を用いる。

星① p.34 16 「うそだよ、そんなこと！ 花はよわいんだ。むじゃきなんだ。できるだけ心配のないようにしてるんだ。トゲをじぶんたちの、おそろしい武器だと思ってるんだ」

星② p.38 110 「…しかし、芽がのびて、小さな木になると、もう、それきりのびなくなって、花をつけはじめました。大きなつぼみが、腰をおちつけているのを、はたで見ている王子さまは、いまに、あつというほど美しいものが、見えてくるように思われてなりませんで

した。でも、花は、緑のへやにじっとして、なかなか、けしょうをやめません。どんな色になようかと、念には念をいれているのです。ゆっくりと着物を着ているのです。…ところが、ある日の朝、ちょうどお日さまがのぼるころ、花はとうとう顔を見せました。なにひとつ手おちなくけしょうをこらした花は、あくびをしながらいいました。

「ああ、まだねむいわ…。あら、ごめんなさい。あたくし、まだ髪をといていませんから…。」王子さまは、そういわれて、〈ああ、美しい花だ〉と思わずにはいられませんでした。「きれいだなあ！」

「そうでしょうか」花はしずかに答えました。「あたくし、お日さまといっしょに、生まれたんですわ」

王子さまは、この花、あんまりけんそんではないな、と、たしかに思いはしましたが、でも、ホロリとするほど美しい花でした。

「いま、朝のお食事の時刻ですわね。あたくしにも、なにか、いだけさせてくださいませんの…」王子さまは、どぎまぎしましたが、汲みたての水のはいったジョウロをとりにいって、花に、朝の食事をさせてやりました。

星③ p.40 11 花は咲いたかと思うとすぐ、じぶんの美しさをはなにかけて、王子さまを苦しめはじめました。…「あたくし、トラなんか、ちっともこわくないんですけど、風の吹いてくるのが、こわいわ。ついたてを、なんとかしてくださらない？」

…「夕方になったら、覆いガラスをかけてくださいね。ここ、とても寒いわ。星のあり場がわるいんですわね。だけど、あたくしのもといた国では…」花は、…ほかの世界のことなんか、知っているはずがありません。思わず、こんな、すぐばれそうなウソをいかけたのが恥ずかしくなって、花は、王子さまをごまかそうと、二、三度せきをしました。

星④ p.42 17 「あの花のいうことなんか、きいてはいけなかったんだよ。…花はながめるものだよ。においがかぐものだよ。…ほくはすこしもたのしくなかった。…ほくはあんまり小さかったから、あの花を愛するってことが、わからなかったんだ」

星⑤ p.46 15 花は、せきをしました。でも、かぜをひいているからではありませんでした。「あたくし、ばかでした…ごめんなさい。おしあわせでね…」

「そりゃ、もう、あたくし、あなたがすきなんです。あなたがそれを、ちっとも知らなかったのは、あたくしがわるかったんです。…もうよそへいくことにお

p.47 18 きめになったんだから、いっておしまいなさい、さっさと！」

星⑥ 花がそういったのは、泣いている顔を、王子さまに見せたくなかったからでした。それほど弱みを見せるのがきらいな花でした。

星⑦ p.74 112 「なぜ？ とっても美しいんですよ」「花っていうものは、はかないものなんだからね」「はかないって？」…「そりゃ、〈そのうち消えてなくなる〉っていう意味だよ」

星⑧ p.87 18 「あたくしたち、バラの花ですわ」…王子さまは、たいへんさびしい気持ちになりました。…たった一つの庭に、そっくりそのままの花が、五千ほどもあるのです。

p.98 18 「あんたたちは美しいけど、ただ咲いているだけなんだね。…だけど、あの一輪の花が、ほくにはあんたたちみんなよりも、たいせつなんだ。…不平もきいてやったし、じまん話もきいてやったし、…ほくのものになった花なんだからね」

星⑨ p.99 110 「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。…めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね…」とキツネはいいました。

星⑩ p.125 14 「ねえ…ほくの花…ほく、あの花にしてやらなくちゃならないことがあるんだ。ほんとに弱い花なんだよ。ほんとにむじゃきな花なんだよ。身のまもりと叫ぶたら、四つのちっぽけなトゲしか、もってない花なんだよ…」

以上バラに関する箇所を抽出した。星に偶然運ばれてきた種が開花したが、自惚れで要求の多いバラとの関係に悩んだ王子さまは星を出る決心をする。だが、地球で出会ったキツネや庭中のバラたちによって「本当に大事なものが」残してきたバラだったことに気付かされる。これが『星の王子さま』のテーマである。

3. 『紅樓夢』と『星の王子さま』の対比

比較文学では一般的に2つの立場がある。1つはフランス学派とでも名付けるべきもので、定義すると「直接かかわりがあると思われる国またはそれ以上にまたがる作家や作品を調べることによって、国境を越えての影響を明らかにしようとするもの」で、これを「比較」と称する。いま1つはアメリカ学派といわれている立場で、「具体的なかかわりがなくても、ある共通項を掘りどころに、国籍を異にする作家や作品を調べることによって相互の関係に迫ろうとし、普遍性と独自性を抽出する」もので、これは「対比」と称する⁽¹⁰⁾。本稿は後者のアメリカ学派の立場で論を進めるが、比較にせよ対比にせよ英語ではどちらも「Comparison (比較する)」であって、厳然たる区別がなされているわけではない。なお、『紅樓夢』の外国語への翻訳状況を鑑みると、サン＝テグジュペリが『紅樓夢』を読む機会はなかったと考えられる⁽¹¹⁾。

『紅樓夢』の絳珠草は甘露の恩を地上で返すために降下し神瑛侍者の流離に付き合ったものの劫が果てて、元の地上界へ戻った。一方『星の王子さま』のバラは王子さまの流離の原因を作ったが、王子さまの精神的成長によって「本当に大事なもの」だと認識され、王子さまの流離が終了した。

このように見ていくと、両者ともに主人公である高貴な少年がホームグラウンドを離れて流離し魂の成長—『紅樓夢』においては地上界である賈家の繁栄を形成すること、『星の王子さま』においてはバラの価値を認識すること—を成し遂げて帰還する一種の「貴種流離譚」であることが指摘できる。

ただし、両者は物語の構造において差異がある。『紅樓夢』が天上界⇔地上界の二重構造であり、夢という形で出入りすることができるのに対して、『星の王子さま』の場合は星⇒話者である地球人「ほく」の墜落した砂漠、のように場所の交換をすることができない。あくまでも王子さまの語る星によってのみ情報が得られるのだ。しかしながら、『紅樓夢』の天上界も『星の王子さま』の星も、基本的に死を媒体としなければ到着することのできない「彼岸(あちら側の世界)」であることに変わりはない。

では、両者を比較する意義は奈辺にあるかという点、「はかなき花への視線」が似通っている

ところである。ここに両者に共通する物語のテーマが存在する。「はかなき花」は女性のメタファーであるということができただろう。絳珠草が地上界で生まれ変わった人物は、非常に美しいが繊細でプライドが高い病弱な林黛玉という少女であった。一方、バラは王子さまの星にどこからかやって来た「ホロリとするほど美しい花」であり、4つしかないトゲを自慢しトラなんかちっともこわくないという性格だが、冷たい風に弱くついたり覆いガラスを要求する花だった。曹霑の身近にモデルとなった女性がいたかどうかは「索隠派」といわれるモデル詮索をする研究者たちによって諸説ある⁽¹²⁾が、林黛玉の人物形象がかなり細かく設定されていることから、身近にモデルとなった少女がいたのではないかと推測できる。一方、バラはサン＝テグジュペリの妻で現代的で美貌のコンスエロ・スンシン（1901年－1979年）を暗喩している⁽¹³⁾。作中バラがせきをする箇所があるが、彼女も実際に喘息気味であり、死因も喘息だった。「はかない」は『星の王子さま』によると「近いうちに消滅する恐れがある、という意味」⁽¹⁴⁾だが、バラに例えられたコンスエロは実際に虚弱だった。

それでは、なぜ二人の作家は「はかなき花」をいつくしむ視線を持つようになったのだろうか。そのカギを2点からアプローチすることとする。

第一は作者の生い立ちについて。

曹霑（康熙54：1715年？－乾隆27：1763年？）が真の作者かどうか議論があるが、今しばし曹霑であるとして⁽¹⁵⁾、曹家の栄光と没落についてなぞってみたい。曹家は漢族であったが、清に入ると満軍正白旗に組み入れられ貴族の身分となった。康熙2：1663年に曹璽が江寧織造の職に着き、皇帝の耳目となって江南地方に任じた。この後は曹寅・曹顥・曹頌がその職を継いだ。曹霑はこのような貴族家庭に生まれ育ったのであるが、康熙帝崩御にともない雍正5：1727年に曹頌が公金横領という名目で免職され、翌年家財没収されている。曹霑は12～3歳頃に、江南から北京へと移ったことになる。その後の生活は窮乏の極みにあつたらしいが、詳しく伝わらない。北京で得たいくたりかの友人と詩の応酬をしたり詩文や絵を書いては売って酒代米代に充てていたらしい⁽¹⁶⁾。一人子を病気で失ったおよそ一年後に自らも小説の完成を見ずに47歳(?)でみまかった⁽¹⁷⁾。

サン＝テグジュペリは1900年ジャン・ド・サン＝テグジュペリ伯爵の第3子（長男）としてフランスのリヨンで生まれるも、1904年に伯爵が亡くなる。1917年には弟フランソワが病死、海軍兵学校を受験したが不合格になり、パリ美術学校の聴講生になる。1921年ストラスブル第2航空隊入隊、民間飛行免許を取得。幼いころから飛行機にあこがれていたサン＝テグジュペリは郵便飛行機乗りとして働くかわら作品を執筆し、1929年『南方郵便機』・1931年『夜間飛行』・1935年『アンヌ・マリー』・1939年『人間の大地』・1942年『戦う操縦士』を発表。1944年7月31日コルシカ島からフランス上空への偵察に出撃、消息を絶つ。1945年、裁判所による死亡認知。44歳で葛藤多き人生を終えた⁽¹⁸⁾。

このように、両者にはいくつかの類似点がある。高貴な家庭に生まれ、幼少時代は物心共に恵まれていたが、新しい皇帝の誕生によって庇護者を失ったことや第2次世界大戦などによって没落していく。いわば、失われた幼時への追憶が作品を書く動機の1つと言えるかもしれない。さらに細かい点を挙げると、両者ともに絵心があり、酒飲みで、友人に囲まれていた。曹霑には幼い子がいたが亡くし、サン＝テグジュペリには子が無かった。

また、2つの作品には愛するがゆえに傷つけあう箇所がいくつかある。が、最終的には絳珠草の化身である林黛玉やバラに対する自分の感情を確認することができた。紆余曲折があったからこそ「はかなき花」に対して表層的ではない愛情を注ぐことが可能になったのである。その具体的な個所を作品から引用する。

紅③(黛玉)「なにもそうむきになることはないでしょう、わたくしがいいそこなったのですから。でも、これがなんだとおっしゃいますの、そんな青筋たてて、あたまじゅうを汗にして怒ったりなさって…」…宝玉はしばらくじっと見つめていたあげく、やっと口を切ったかと思うと、「安心なさったらいい」とほつり、黛玉はそういわれて、しばし呆気にとられていましたが、…「…もとはといえば、あなたは安心がゆかぬばかりに、そんなご病気にかかられたのです。…」黛玉はこのことばを聞いて、…わが胸のうちからつかみだした以上に、適切にいつてもらったような心持がして、…⁽¹⁹⁾

星⑪(キツネ)「さっきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ」…「あんたが、あんたのバラの花をとでもたいせつに思ってるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」…「…めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなきゃならないんだよ、バラの花との約束をね…」

「ねえ、…ほくの花…ほく、あの花にしてやらなくちゃならないことがあるんだ。ほんとに弱い花なんだよ。ほんとにむじゃきな花なんだよ。身のまもりといたら、四つのちっほけなトゲしか、もってない花なんだよ…」⁽²⁰⁾

『紅樓夢』では主人公林黛玉の病気・涙の原因をズバリと言いあて、「安心なさったらいい」という一言で以て「この人のすべてを受け入れる」という自分の覚悟を述べた。『星の王子さま』ではキツネに教えてもらった「秘密：かんじんなことは目に見えない」によって、王子さまはバラが自分にとって1つしかない花だったということに気づき「バラのすべてを受け入れる」決意を固め、星に戻ることにした。両者ともに「はかなき花」は他の誰でもなく、この自分が愛さなくてはならないのだ、という結論に至っている。この偶然は作者の数奇な生い立ちとともに、作者にとって唯一愛することのできる女性の存在があったこと、そして何よりも彼女たちへの敬意があったことが、時間・空間を異にしても共通する「すべてを受け入れる愛」というテーマとなりえたのではないか。

考察の第2は信仰への懐疑という点である。

まず『紅樓夢』から見てみると、曹霑の生きた時代は清朝であり、国教は仏教の中で特に文殊菩薩であった。しかし、中国ではどの時代においても地域・家庭・個人によって信仰対象が様々であり、実際『紅樓夢』にも仏教・道教に関する記述が散見するが作者の宗教観はあいまいである⁽²¹⁾。そればかりか、仏教を心から信仰している母親の王夫人に対して信仰を継承しようとしている素振りはない。妙玉・探春といった身近にいる仏教信者に対しては宗教的というよりも人間的な接近をしている。『紅樓夢』主人公の信仰対象は少女のようである。『紅樓夢』

の有名な科白「女の子はみな水でできた身体、男はどれも泥でできた身体。女の子になら会っただけでわたしは気がはればれする。だのに男に会うと臭くて胸がむかつくのだ」⁽²²⁾及び、賈宝玉が反転した人物形象である甄宝玉の言った「この女の子ということばは大変尊くって、大変清浄なのだ。あの阿弥陀さまや元始天尊（道教の神々の一人）などという二つのご名号よりももっとずっと尊くって絶対的なものなのだぜ」⁽²³⁾に見えるように、作者は清らかな少女に対して信仰とも取れる描写をしている。

一方、サン＝テグジュペリの場合は、9歳でイエズス会聖十字架学院に入学したものの、後に「ぼくに信仰がもてないなんて本当にふしぎです。神は希望をもたずに愛するものです。それならばくにびつたりのはずなのに。」と告白している⁽²⁴⁾。実際に『星の王子さま』で王子はバオバブの芽を食べてくれる羊を欲しがったが、サン＝テグジュペリの周辺にあったキリスト教において羊は「迷える小羊」として扱われている。すなわち、百匹の羊のなかで一匹を失えばずっと探すのがキリストである⁽²⁵⁾が、王子は一匹の羊が必要だった。

他にも草食動物はいくらでもいるのに1匹の羊を登場させる所に、信仰への懷疑が感じられる。このように宗教的な環境にありながらも、心からの信仰を持つことのできなかつた⁽²⁶⁾サン＝テグジュペリは、コンスエロを知り得てからはまるで求道者のように彼女を崇拜した。『星の王子さま』はキリスト教信仰に対して懷疑を抱いていたサン＝テグジュペリが、初めて魂の救済を求め得る対象として得たバラ・妻コンスエロに向い、一種の信仰告白を行なったのだと考えられないだろうか。

おわりに

本稿では『紅樓夢』の登場人物 林黛玉のメタファーである絳珠草と、『星の王子さま』では妻コンスエロのメタファーとして描かれているバラを対比することにより、両作品に共通して「はかなき花」への視線が見え、それは「すべてを受け入れる愛」であることを指摘した。

そして、その似かよった視線の原因を2人の作者の生い立ちの類似と信仰への懷疑に求めた。両者は時間・空間を異にしつつも「はかなき花」への優しいまなざしが共通しており、それが作品のテーマの1つとなっている。すなわち、脆弱な賈宝玉と王子さまが「はかなき花」に翻弄されながら魂の成長を成し遂げ、真実に接近していくことが両作品に共通するテーマである。「はかなき花」は嘆き・喚き・皮肉を言う、意志を持った花であった。そこに心から共感して惜しめない無償の愛を注ぎ、それを作品化した人が2人存在したということが言えよう。賈宝玉は甘露を絳珠草に注ぎ、王子さまは汲みためたの水をバラに注いでやった。これらの「水」が愛情を象徴していることも明白である。

なお、本稿は2012：平成24年12月8日、日本大学文理学部で行なわれた国際文化表現学会東京研究会で口頭発表したものに基づく。

注

(1) 本邦で初めて『紅樓夢』と『源氏物語』との比較を発表したのは、依田學海（1834：天保

- 4年-1909：明治42年）であり1906：明治39年『こゝろの華』4月号（p.32）だとされる。（「居士は源氏を小説とみてゐるが、それに似てゐるのが紅樓夢である」などとある）その他単行本としては吉田とよ子『色は匂へど「源氏物語」と中国の情艶文学』上智大学出版2004：平成16年 があり、この2作品を比較した論文の数は膨大である。
- (2) 『武田泰淳全集』第12巻 筑摩書房 1972：昭和47年 pp.439-443 所収。初出は「リアル」第3号 1947：昭和22年と推定される。（全集第12巻p.473「解題」）
- (3) 『紅樓夢』には旧稿の存在が複数存在すると言われ、小説第1回に「曹雪芹が悼紅軒にて十年がかりでこれに眼をとおし、その間、手を入れなおすこと五度、目録を編み回を分かち、『金陵十二釵』と命名したことです…さらに脂硯齋が甲戌の年に書き写して読み、かさねて評を加えたとき、『石頭記』の題名を復活させて用いるようにしたのです。」とあるように何度も手直しをし、その最中に作者急逝という事情から完成することができなかった。脂硯齋とは『紅樓夢』に評を加えた人物だが、特定されていない。『紅樓夢』の手稿を高鶚が露店で見つけて続作したという説や、後半部分も曹霑の手稿があり、高鶚はそれを継ぎ合わせたにすぎない、という説もある。
- (4) 『紅樓夢』は『西遊記』『三国演義』『水滸伝』などと同じく章回小説（講談のスタイル）という形をとっているが、実際には講談から起草されたものではなく『金瓶梅』のように1人の作者が構想した、今日的な小説である。小説の名も『石頭記』『情僧録』『風月宝鑑』『金陵十二釵』があり、現在では『紅樓夢』が定着している。
- (5) 姚燮によると男282人・女237人を数えるという。伊藤漱平訳『紅樓夢』上 平凡社1973：昭和48年 p.572
- (6) 曹家は江寧織造の職に就き、康熙帝の信任が厚かった。しかし、雍正帝が即位するとうとまれ、公金横領という名目で免職され、家財没収されてしまう。『紅樓夢』も同様に栄華を極めた買家が没落していき、最後には家財没収という目に遭うことが書かれている。ここから、自伝的小説と言われている。
- (7) 伊藤前掲書（上）第1回pp.8-9
- (8) 伊藤前掲書（下）第116回pp.496-497
- (9) ナタリー・デ・ヴァリエール／南條郁子訳『星の王子さまの誕生』創元社 2000：平成12年 pp.144-145「サン＝テグジュペリ略年表」
- (10) 渡邊洋『比較文学研究入門』世界思想社 1997：平成9年 p.102
- (11) 伊藤前掲書（上）p.583によると、1893年に英文抄訳が、1932年に独文抄訳が出版されているが、フランス語版は1957年になってやっと出版されており、サン＝テグジュペリが読む機会はなかったと考えられる。
- (12) 『紅樓夢』主人公のモデル説には以下のようなものがある。順治帝と董小宛、曹霑の祖父など。
- (13) 従来、『星の王子さま』のバラには様々な説（愛のシンボル・王子さまの愛・唯一の女性像・妻コンスエロ・婚約者ルイズ・母親・神・祖国フランス）があった。（三野博司『「星の王子さま」辞典』大修館書店 2010：平成22年 pp.118-124）しかし、2004年8月27日付「ル・モンド」紙に『「星の王子さま」と芸術の女神…「薔薇」とは誰のことか、56年経って

やっと判明した！」という記事が載った。要旨は、2000年にサン＝テグジュペリ生誕100年を記念した事業の中で、ピエール・シュヴェリエの研究に大きな穴があり、コンスエロ分析を無視したのだ、ということである。事実は、『星の王子さま』が執筆された1942年、彼らはニューヨークで疎開しており、仲直りをしたところだった。バラが「世界でただ一つのもの」であり「手なずけたものには、ずっと責任がある」と理解したのだ。(http://homepage/mac.com/naoyuki_hashimoto) なお、コンスエロが戦後に書いた手記は彼女の死後20年を経て2000年に『バラの回想』プロン社（香川由利子訳／文藝春秋社）として出版され、翌年にはプロン社から『日曜日の手紙』（邦題『サン＝テグジュペリ 伝説の愛』鳥取絹子訳／岩波書店2006：平成18年）として刊行された。中には『星の王子さま』がコンスエロに捧げられようとしたのをレオン・ヴェルトに変えたいきさつも見える。(p. 128 「『星の王子さま』を彼の友人レオン・ヴェルトに捧げるよう提案した彼女に、続きを書くつもりだからきみをそのヒロインにしよう、そしてそれをきみに捧げようと言った。「きみはもうトゲのあるバラではないだろう…」)

- (14) 『星の王子さま』 p. 87
- (15) 封建時代の中国では小説を文学として認めず、作者もほとんど匿名であったため『紅樓夢』の作者についても穿鑿されなかった。民国に入ってから胡適・李玄伯らによって作品中に登場する「曹雪芹」が曹霑であることが指摘された。近年の周汝昌・呉恩裕の調査研究によってその説が補充された。しかし、作品の科白部分が北京語であることを考慮すると、幼時から少年期を南京で過ごした曹霑が作者であるのか疑問視されたり、曹霑は詩詞を作成するだけの役割だったとの説もあり、いまだ定説をみない。
- (16) 曹霑の友人だった愛新覺羅敦誠が乾隆26：1761年に作った詩によると、余技の絵を売ってやっと生活している状況が詠まれている。
- (17) 伊藤漱平『紅樓夢』（上）「解説」 pp. 566-568
- (18) ナタリー／南條前掲書「略年表」
- (19) 伊藤前掲書『紅樓夢』（上）第32回 pp. 438-439
- (20) 『星の王子さま』 p. 99・p. 125
- (21) 『紅樓夢』には別名がいくつかあり、そのうちの一つは『情僧録』という。物語最後に科挙の試験場から失踪した賈宝玉は出家して仏教に帰依することになっているが、信仰についての独白はみあたらず、物語の構成上での出家と見られている。
- (22) 伊藤漱平前掲書『紅樓夢』（上）第2回 p. 27
- (23) 伊藤漱平前掲書『紅樓夢』（上）第2回 p. 28
- (24) ナタリー／南條前掲書 p. 125
- (25) 「ルカの福音書」15章 『新改訳小型聖書』日本聖書刊行会 1970：昭和45年 p. 146
- (26) 17・8歳の頃は信仰の危機にあったという。渡邊義愛『サン＝テグジュペリ』ヨルダン社 1973：昭和48年 p. 12

中国語原文

①只因西方灵河岸上三生石畔，有绛珠草一株，时有赤瑕宫神瑛侍者，日以甘露灌溉，这绛珠草始得久延岁月。后来既受天地精华，复得雨露滋养，遂得脱却草胎木质，得换人形，仅修成个女体，终日游于离恨天外，饥则食蜜青果为膳，渴则饮灌愁海水为汤。只因赏未酬报灌溉之德，故其五内便郁结着一段缠绵不尽之意。恰近日这神瑛侍者凡心偶炽，乘此昌明太平朝世，意欲下凡造历幻缘，已在警幻仙子案前挂了号。警幻亦曾问及，灌溉之情未偿，趁此倒可了结的。那绛珠仙子道：‘他是甘露之惠，我并无此水可还。他既下世为人，我也去下世为人，但把我一生所有的眼泪还他，也偿还得过他了。’

②走入一座宫门，内有奇花异卉，也都认不明白。惟有白石花阑围着一棵青草，叶头上略有红色，但不知是何名草，这样珍贵。只见微风动处，那青草已摇摆不休，虽说是一枝小草，又无花朵，其妩媚之态，不禁心动神怡，魂消魄丧。…神仙姐姐既是那管理仙草的，必然是花神姐姐了。但不知这草有何好处？”那仙女道：“你要知道这草，说起来话长着呢。那草本在灵河岸上，名曰绛珠草。因那时萎败，幸得一个神瑛侍者日以甘露灌溉，得以长生。后来降凡历劫，还报了灌溉之恩，今返回真境。所以警幻仙子命我看管，不令蜂缠蝶恋。”宝玉听了解，…

③“你别着急，我原说错了。这有什么的，筋都暴起来，急的一脸汗。”…宝玉瞅了半天，方说道“你放心”三个字。林黛玉听了，怔了半天，…你皆因总是不放心的原故，才弄了一身病…”林黛玉听了这话，…竟比自己肺腑中掏出来的还觉恳切，竟有万句言语，满心要说，…

フランス語原文

①-Je ne te crois pas! les fleurs sont faibles. Elles sont naïves. Elles se rassurent comme elles peuvent. Elles se croient terribles avec leurs épines…

②Le petit prince, qui assistait à l'installation d'un bouton énorme, sentait bien qu'il en sortirait une apparition miraculeuse, mais la fleur n'en finissait pas de se préparer à être belle, à l'abri de sa chambre verte. Elle choisissait avec soin ses couleurs. Elle s'habillait lentement, elle ajustait un à un ses pétales…Et puis voici qu'un matin, justement à l'heure du lever du soleil, elle s'était montrée…dit en bâillant:

-Ah! Je me réveille à peine… Je vous demande pardon… Je suis encore toute décoiffée…Le petit prince, alors, ne put contenir son admiration:

-Que vous êtes belle!

-N'est-ce pas, répondit doucement la fleur. Et je suis née en même temps que le soleil…

Le petit prince devina bien qu'elle n'était pas trop modeste, mais elle était si émouvante!

-C'est l'heure, je crois, du petit déjeuner, avait-elle bientôt ajouté, auriez-vous la bonté de penser à moi…

Et le petit prince, tout confus, ayant été chercher un arrosoir d'eau fraîche, avait servi la

fleur...-Je ne crains rien des tigres, mais j'ai horreur des courants d'air. Vous n'auriez pas un paravent?

③-Je ne crains rien des tigres, mais j'ai horreur des courants d'air. Vous n'auriez pas un paravent?...-Le soir vous me mettez sous un globe. Il fait très froid chez vous. C'est mal installé. Là d'où je viens.....Elle était venue sous forme de graine. Elle n'avait rien pu connaître des autres mondes. Humiliée de s'être laissé surprendre à préparer un mensonge aussi naïf, elle avait toussé deux ou trois fois,

④me confia-t-il un jour, il ne faut jamais écouter les fleurs. Il faut les regarder et les respirer....Je n'ai alors rien su comprendre!...La fleur toussa. Mais ce n'était pas à cause de son rhume.
-J'ai été sotté, lui dit-elle enfin. Je te demande pardon. Tâche d'être heureux.

⑤-Mais oui, je t'aime, lui dit la fleur. Tu n'en a rien su, par ma faute....Tu as décidé de partir. Va-t'en.

⑥Car elle ne voulait pas qu'il la vît pleurer. C'était une fleur tellement orgueilleuse...

⑦-Pourquoi ça! c'est pas joli!

-Parce que les fleurs sont éphémères.

-Qu'est ce que signifie: "éphémère"?...-Ca signifie "qui est menacé de disparition prochaine".

⑧-Nous sommes des roses, dirent les roses....Et il se sentit très malheureux....Et voici qu'il en était cinq mille, toutes semblables, dans un seul jardin!

-Vous êtes belles mais vous êtes vides,...Puisque c'est elle que j'ai écoutée se plaindre, ou se vanter, ou même quelquefois se taire. Puisque c'est ma rose.

⑨-Les hommes on oublié cette vérité, dit le renard. Mais tu ne dois pas l'oublier. Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...

⑩Tu sais... ma fleur... j'en suis responsable! Et elle est tellement faible! Et elle est tellement naïve. Elle a quatre épines de rien du tout pour la protéger contre le monde...

⑪Voici mon secret. Il est très simple: on ne voit bien qu'avec le coeur. L'essentiel est invisible pour les yeux....-C'est le temps que j'ai perdu pour ma rose... fit le petit prince, afin de se souvenir....Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...